結婚、出産をしても仕事を続けてほしい。女性の存在が現場を少しずつ変えていくはず。

元木 倫子 Motoki Noriko

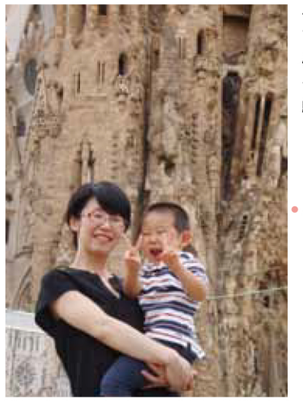
助教（診療）医学部附属病院小児科

東京都生まれ。信州大学医学部を卒業し、同大学小児医学講座に入局。専門は小児循環器。

My Life Story

東京都出身。臨床実習を回っているなかで小児科を選択。ドクターになって5年目に循環器内科の夫と結婚し、すぐに大阪の国立循環器センターに二人してレジデントとして3年間勤務。結婚8年目で出産し、同時に夫の留学でアメリカへ。一旦退職後、帰国してから信州大学に復帰した。

私流 My Life



小さな子どもがいると、なかなか学会にも参加できません。夫の後押しがあって、ヨーロッパ心臓病学会に参加。子守役の夫も連れて、バルセロナへ。大変でしたが、家族にとって良い経験になった。

子どもができて生活が一変

いまの生活は、朝4時に起きて、朝ご飯と夕ご飯の用意と洗濯をし、みんなが寝ている間に仕事をして、8時に子どもを「おひさま保育園」に送って出勤。夕方6時に迎えに行って、ご飯を一緒に食べたら私は子どもと寝てしまいます。

前に夫と家で仕事の話をしていたら「喧嘩しないで」と子どもに言われたことがあるんです。どうも仕事の話をしているとディスカッションみたいになって、それが子どもには喧嘩しているみたいに見えるらしいんですね。トーンが変わるみたいなんです。それ以来、家ではあまり仕事の話はしないようにしています。

退職して仕事がしたかった自分に気づく

4年前、子どもを産んですぐに夫が留学することになって、私も退職し、2年間アメリカのクリーブランドで暮らしました。出産、退職、渡米という出来事が一気にやってきて、心身ともに大変でした。

子どもができたのが遅かったので、キャリアには支障がなかったのですが、子どもができてからは育児中心になり、自分の時間が全くとれなくなり、自分でも気づかないうちに精神的に追い込まれていったんですね。

アメリカでの生活も最初はつらくて、鬱々としていました。私は仕事を辞めたけど夫は仕事を続けている……。そのギャップも感じたりして。それで、仕事がしたくてしたくて、帰ってきてから信州大学に復帰したんです。

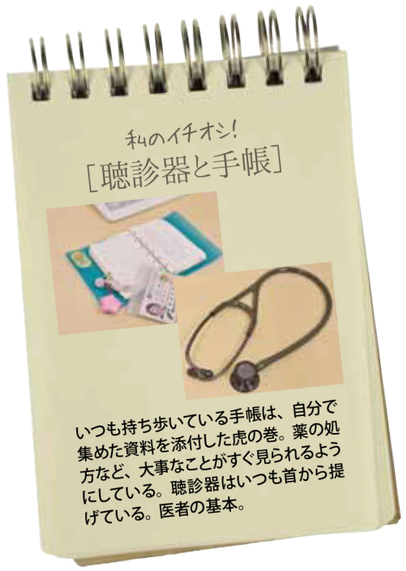
でも、子育てしながらの仕事なので、無理を言って夜間や休日の仕事を免除してもらったり、わがままをきいてもらったりしながら、今2年目になってやっとリズムがつかめてきたところです。

女性の力が現場を変えてくれるはず

自分が母になってみて、本当にお母さんて大変だな、と実感してます。それまで診察しながら平気で「ダメだよ、お母さん」なんて言ってましたけど、たやすく心無いことを言ってしまったな、と思います。医師の世界はまだまだ男社会なので、女性にとっては不利な職場や科も多いのではないかな、と思いますね。

その点、小児科は子どもやお母さんと仕事をすることが多いので、女性という立場が生かされる職場だと思います。医師が女性だと子どもが泣かない率が高いと言われるので、ちょっと有利かもしれません。

医師の世界は、仕事をがんばる時期と結婚・出産の時期が重なっているので、結婚や出産を機に仕事をあきらめてしまう女性も多いですが、パートナーや職場の協力を得られれば、仕事を続けられると思います。どんな形であっても女性の力が入っていくことで医療の現場も変わっていくんじゃないでしょうか。信州大学の学生も女性が半数近いので、変わっていかざるをえないと思います。



いつも持ち歩いている手帳は、自分で集めた資料を添付した虎の巻。薬の処方など、大事なことがすぐ見られるようにしている。聴診器はいつも首から提げている。医者の基本。

インタビュー：平成26年